

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和8(2026)年
3月号

通巻667号
毎月23日発行

(題字 矢追日聖)

★発行日 令和8年3月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷
★定価 1部300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



現在の大倭神宮 (青山法義さん撮影・文3頁)

立教開宣文 (敗戦81年、御帰幽30年)

法主 矢追日聖 (満33歳)

立教開宣文

敗戦後の日本、神国なるが故に武器は消えた。世相は乱れて秩序なく、人心恟々として明日の安心を求む。宗教は地に墮ちた。だがその残滓のみ大空に響いて、瞬間的享楽を、或いは芥箱に生命の糧を漁って歩む社会大衆を、冷たき眼で見送っている。

日聖は立つ、既成宗教の墮落は日聖を立たしめた。六合の中心地、嘗て和の光を放てる金鶏発祥の霊地大倭に、日聖は神が与え給う使命に不惜身命にて精進する。

中心より生まれる中心の教えが金鶏の如く世の闇を照らす東方の光となるであろう。大倭教は神のまにまに刻々転化の途をたどって動くことと信ず。

現世を憂うる若人よ!! 日聖と生き、日聖と死せんとする情熱の男女よ、あらば来たれ、ともに世界平和の捨石となろう。主義に生き、主義に死のう。日聖さきがけたり、若人よ続け!!

世界平和の鍵は日本に在り、日本の中心は大倭に、大倭の中心は日聖の肚に在る。

黎明は訪れたり昭和維新、五十年、百年後の歴史が日聖の使命を雄弁に物語るであろう。

昭和二十年八月十五日

日聖 敬白 拍手

奈母太加天腹

『むすびの家』物語』に想う

京都市 加納 暉きこう 韜

本との出会い

久しぶりに紫陽花邑を訪ねて視会に参加した。そこで『むすびの家』物語』が書庫にあるなら読ませてほしいと依頼した。『おおやまと』令和7年6月号(通巻658号)に掲載された木村聖哉氏(以下、敬称略)の「柴地則之と法主さんの思い出」の投稿記事がおもしろく、紫陽花邑にある「交流の家」完成の経緯は同書に詳しいと書籍表紙の写真とともに紹介されていたからである。1997年 岩波書店から刊行され木村聖哉と鶴見俊輔共著の、その一冊は紫陽花邑からの帰り際に福田きよ子から手渡された。



現在の「交流の家」

同書は「交流の家」が大倭紫陽花邑に建設されたいきさつから完成、その後の利用のされ方までを、「交流の家」発案者である柴地則之と「交流の家」やハンセン病に関係した人たちのことを交えて、前半1部は木村が、後半2部は木村の恩師である鶴見俊輔が執筆している。木村自身は「交流の家」に関わった渦中の人であり、仲間たちの活躍を描き得る立場にあった。木村は実際の活躍内容を記し、鶴見は関係のあった人たちのことはもちろん、その人たちの詩を添えたりすることで、ハンセン病を介して人の在

り方を考えさせられるような内容となっている。木村も鶴見も冷静な筆致であり、抑えられていたものが読んだ側に伝播してくるのである。

建設への紆余曲折

1960年、学生たちがデモなどにより体を張って安全保障条約締結に反対した、いわゆる安保闘争は先の戦争で家族を失った者など、さまざまな理由で戦争があつてはならないと願う人たちの応援を得て頂点を極める。締結によりアメリカの戦争に否応なしに巻き込まれていく可能性を危惧したからだ。5月に警官隊が導入されるようになると、闘争はより一層、過熱する。しかし、締結阻止を目的とする岸内閣退陣、国会解散と声をかからしめたシユプレヒコールは、その甲斐なく、6月に安全保障条約は締結される。太平洋戦争で、あれだけ痛い思いをしたのに戦争への扉が閉じられることはなかったのである。

この結末は、学生たちに燃え尽き症候群に似ただるさを感じさせたにちがいない。しかし一方で、学生運動で培われた思考や熱意は、何もしない学生生活を送ることをこころよしとはしなかった。新しい活躍の場を求めたのである。それが柴地を、学生たちを、彼らの活躍を知った大人たちを、らい回復者の行動拠点「交流の家」建設へと結び付けていった。

FIWC委員長だった柴地は、日聖法主に「交流の家」を建設するための土地の供与を依頼する。交渉力を有す、さすがの柴地も厚かましいと思っ

てかモジモジして、すぐには要件を切り出せないでいたのだが、その要件を聞くや、自称「善意の独裁者」である日聖法主は、稲作をしている150坪の土地を利用することを、その場ですんなり許可する。いとも簡単に土地を供与した、そのあつけなさに緊張がゆるんだのか、瞬間、柴地は風船玉の空気が抜けたようになったと、後日、日聖法主は追憶している。

かたや日聖法主は、柴地から要件を聞いているとき、光明皇后の明るい微笑みを感じていたという。紫陽花邑のその地は、奈良時代、光明皇后がらい患者のための施設を建てたところで、光明皇后はらい患者の膿を吸って、らい患者をいたわったという伝承をのこす。裏では光明皇后の働きかけがあつたのだろうか。いずれにせよ、紫陽花邑は、らい病患者に手を差し伸べたいとする者が活躍する因縁の地だったのである。



交流の家建設に反対した住民と法主が話し合った様子

もと起工式が催され基礎工事が開始するのだが、素人集団ゆえに進捗は芳しくない。どうすればいいか暗中模索しているところ、に事件が起こる。近隣の農村の人たちが大挙して、建設の中止

を訴えてきたのである。そのような施設が建てば土地値が下がる、地域の印象が悪くなる、田の水に菌が流れ込んだら、などが理由であった。らい病に対しての認識のなさを起因とするものが、今なら、こんなことにはならないだろうと思ったりしないでもない。

農村の人たちは紫陽花邑への暴力を匂わせて脅迫もしている。真剣だったのである。彼らは建設中止を掲げて日聖法主に詰め寄る。すると日聖法主は決定の全権を学生たちに委ねるのである。さあ、学生たちよ、どうする！

この事件が片付いたあと、政府はある額の建設資金を供与してもよいと学生たちに申し入れてくる。その額は、学生たちがはじめていた建設予算をはるかに上回っていた。学生たちは、その申し入れをどうしただろうか。このあたりのことは本を読んで知ってもらったほうが良さそうである。

なお、本には記載されていない余談だが、建設の中止を猛烈に要求した農村の人たちのリーダーは、事件後、柴地とかけがえない友人となる。そしてリーダーの子息は柴地が立ち上げた大倭殖産株式会社への就職を熱望して社員になっている。柴地に採用の難色を示されても子息は喰らいついて離れなかったのである。

回復者の方々と交流

「交流の家」は完成すると、FIWCが管理、運営した。しかし、管理人まで常駐させるのは難しい。そこへ、らいの人と暮らせるのはこしかなないと飯河梨貴が飛び込んできて、飯河夫妻が管理人になる。夫妻は三人の子供を早世で失い、逆縁のつらさを知る人であった。

ここでは年に一度、囲碁将棋大会が催され長島

愛生園の、らい回復者と学生たちとの間で互角の熱戦が繰り広げられた。手の不自由な人は碁石をスプーンですくって打った。女子学生たちは腕を振るった。夜は皆で酒を酌み交わした。らい回復者たちは、年に一度のこの大会を楽しみにした。「交流の家」は、らい回復者の社会復帰を支援する施設であるのみならず、善意の象徴だった。「交流の家」に関わったすべての人が得難い何かしらのものを得たことだろう。それは「交流の家」の施設としての機能に劣らない貴重なものだったにちがいない。

1996年3月、らい予防法が廃止される。らい患者は今までの隔離から解放されたのである。制定されて89年が経っていた。鶴見俊輔は自分の目の黒いうちに予防法が廃止されるとは思っていなかったという。木村は、らいの差別問題がようやく解決して、「長い長い青春がやっと終わった」と思う。それからしばらくして、木村のもとに福田きよ子から一通の手紙が届く。以下、要約。

——例年、長島愛生園の夏祭りに参加している。子供たちを生まれたときから連れていっている。夏休みは長島のおじいちゃん、おばあちゃんのところへ行くのが当然のようになっている。花火も見た。夏祭りが続く限り参加していきたい。わたしに大きな打ち上げ花火はあげられない。——手紙から、木村は「終わった」と区切りをつけた自分と、らい患者たちと静かに交流を続けてきて、それを続けていこうとしている福田の姿勢を比較している。

話は変わるが、ずいぶんと前のことである。鏡池の岸は短い草がところどころに生え、野になろうとしていた。桜が春を満喫させてくれる。桜の樹の下にリクライニングタイプの車椅子が2つ、

揃えて置いてあった。遠目に中を見ると、それぞれに子のように見える障害のある方たちがあおむけに、うつうつ言いながら、花に向けて手を伸ばしている。共に喋ることかなわず、立つこともままならないようだ。横には座って談笑する2人の職員の姿があった。職員は桜を見せてあげようと車椅子で連れてきたようだった。桜と障害のある方たちと職員とが一体であるように感じた。

紆余曲折の4年をかけて、1967年7月30日に「交流の家」は竣工している。「交流の家」は当て字で、「むすびの家」命名の由来は「みんなが手をむすぶ家」に「一緒にむすびをほおぶる家」の意をかけたものだろう。生まれた年もっと前なのだが、私はこの日の夜明けに生まれた。今度、紫陽花邑に行ったら老朽化している「交流の家」の前に、たまたみでみよう。(※あえて「らい」という言葉をそのまま使いました)

表紙写真について

昭和45年8月15日の敗戦の日に、法主は大倭神宮に参拝し、「神意を感じて『立教開宣文』を綴り、神の大前に捧げて実質的な宗教活動の第一歩を踏み出した」と語っています。そのことを踏まえて今回は現在の大倭神宮の写真をご載せさせていただきました。

法主・言の葉



対立闘争の心は常に平和を攪乱し人類に不幸を招来する。神ながらの大道に順応帰一するは平和建設、人類福祉の根本理念である。

令和7年6月31日〜7月6日

こもれる魂魄の地を訪ねて(第56回 ③)

鹿兒島から高千穂まで

大倉 有 宏

今回、この稿を書くことになったのは「新婚旅行記」でも書きませんかと言われたのでお受けしたものであったが、読んでいただいていたの通り、「霊界交流記」のようになることはわかっていたので、お受けした段階で、私としては霊人のために、または参考資料として書くという目的意識になっていたことをまた注釈しておきたい。今回で終了ということで、この観点から、記しておきたいものに限定して記すこととした。

高千穂を出て、阿蘇を巡り、熊本を巡り、今度は吉野ヶ里遺跡に到着した。吉野ヶ里遺跡と私には切り離せない縁がある。幼少期かなり霊感が敏感であったのか、過去世と今世の境目がかなり曖昧なところがあり、現代の普通とは異なることが沢山あった。その一つが吉野ヶ里であった。



新婚旅行らしい高千穂峡

テレビ(プロジェクトX)で初めて甕棺を見たときに歓喜して、甕棺やあの当時の生活で頭がいっぱいになったことを記憶している。ついでにプロジェクトXの主題歌の『地上の星』も気に入ったように、拜殿でも故大

倉佐和子(叔母)の演奏で歌ったことを覚えてくださっている方もあるかもしれない。この頃は家でも前方後円墳を庭に作ったり、そんなことばかりしていた。

吉野ヶ里は初めてではなかった。到着すると、小学生の頃に初めて吉野ヶ里に連れて行ってもらったときのことが蘇り、帰る直前にスクールだったのが突然激しい雷音に急いで車に戻ったことを思い出した。

今回も晴天からはじまった。じりじりと暑い中を遊ばせてもらった。祭祀等するが特に感応はなかった。と思っていたが、統治者が祭祀をしていたという楼閣にのぼったときには、女王的な方から「ヨウコソノオコシ」との念声を感じた。今回は最後まで晴天のまま、吉野ヶ里を後にした。

次は、太宰府に移動した。太宰府と言ってもまずは大宰府政庁跡の方からである。自分の足跡を振り返るにどうも菅原道真公との何かの縁が深いように思われて、3度目ではあるが何うことにした。太宰府でも小学生で初めて行った時は帰る直前に雷雨となったと、帰ってから父に聞かされた。大宰府政庁跡で、感じるままの霊人方にご挨拶をした。その後、そばにあった博物館で斉明天皇という存在を知り、その供養のために建てられたという観世音寺にも伺っておいた。

今回のメインとしては、菅公が最晩年を過ごしたという榎社という所へ伺った。在りし日の菅公の思いに寄り添っておきたいという気持ちで伺ったが、反射的に出てきたのは全く違う人物で、菅公の息子娘と従者といった感じで感じてきた。そうか、そういう人たちもいたかと思ひ、今どきなのでネットで検索してみる。そういう人たちがいたことの確認が取れた。

太宰府天満宮の方へも伺っておいた。何がそう

させているのか、ここでも霧島神宮のときのように前のめりに二三歩進むようなことが起こった。拜殿裏に回ると、息子従者らの祠があった。帰ってからすぐの頃、教務本庁でたまたま菅さんという方に出会い、菅公の息子さんの子孫ということを知ることがあり、これが面白かった。

また太宰府の近くに最澄(伝教大師)が入唐の前に一年以上滞在した宝満山という場所があり、そちらにも伺った。ここに関しては不可思議なことがあるのであるが、省略することにする。約束なく伺ったが、縁があれば見ることになるだろうと一か八かで伺った妙香庵で、玄関に立っていると任職が出て来られ、最澄が彫ったとされる秘仏をお見せいただく一幕があった。帰ってきてすぐに、九州での梅雨の再開が報じられていた。

あとは宇佐や壇ノ浦や美甘に寄って、長い新婚旅行から帰ってきた。高千穂の一瞬以外、晴天続きにいらしたことに感謝であった。

その翌日だったか、平城宮跡に無事帰宅の挨拶をしにいったときであった。唐突に「ありまのみこ」と名乗って来られる。「わたしのこともわすれないでほしい」と念声の心地。記憶にない名前に、そんな人物がいるのかからまずは調べる。すると斉明天皇との権力争いで19歳にして処刑されてしまった有間皇子という方であったようであった。和歌山にお墓があることを確認し、また参りますと約束しておいた。杉本さんに聞くと東光大祭で祀ってあげたらとのことであった。東光大祭ではそうしたこともあったのか、法主の気を強く感じて号泣することになった。

この3月1日にどうしても今日来てほしいという感じを受けて、無事と歌山のお墓へ伺った。藤白峠の上から、一緒に景色を楽しんだ心地がした。

大倭会文化講演会報告 (平成7年11月9日実施)

「沖繩から自然と人間のあり方を考える」
〜学校という場で僕が教わったこと。ものとひとの歴史〜

講師 盛口 満氏

ドラえもんの四次元ポケット

青山 法義

11月9日大倭拜殿にて元沖繩大学学長盛口満氏をお迎えして大倭会文化講演会を開催。その日のうちに沖繩に帰るとのこと、前日の8日の朝一番の飛行機で関西空港に到着されました。少し立ち寄りたいところがあるとのこと、大和西大寺で11時30分に待ち合わせ。

出てこられた姿を見て、なんと大きなリュックを背負って来られたんだと思っていたら、講演の中でとても重要な役割を果たすものが入っていました。

話を約1年前に巻き戻し、令和6年12月、前任の李章根さんからバトンを受け継ぐ形で大倭会文化講演会の担当を引き受けることに……。今までは音響、パソコンの準備、当日の記録写真撮影など気楽に関わっていましたが、今回担当となったことで、



タヌキの毛皮を見る子ども達

春先から責任重大とプレッシャーを感じながら、「なるようにしかならない」と岸田会長と連携を取りなが

ら準備を進めてきました。

講師の盛口氏は千葉県生まれ。自然が作り出す潮の流れから南国にしか生息しない貝殻を見つけ、親にねだり図鑑を買ってもらい貝殻などの名前を調べるうちに生き物とのつながりが大きくなったそうです。

前日のお昼前に大倭に到着。教務本庁で杉本さんや岸田会長と挨拶を交わされた後、会長の勧めで矢田山公園の「子どもの森」に行かれ時間を過ごされました。夕刻大倭に戻られ、大倭会館にて有志で歓迎会を開催。屋久島から参加された手塚さんご夫婦や、吉野の森と水の源流館の木村さん親子などが参加され、にぎやかに行われました。

当日はあいにくの雨でしたが、徐々に雨も上がり、49名の方が参加されました。参加者の中には小学生もおり、先生も徐々にボルテージが上がりとともに楽しそうに話を進められました。ご自身も童心にかえり、子どもの気持ちで話されているように感じました。

動物の生態で歯の形からどんなものを食べているのかがわかると話され、あの大きなリュックからドラえもん四次元ポケットのように、次から次へとさまざまな動物の骨が出てきました。骨を手を持ち、会場の子どもの所へ一目散に向い、「これ何の骨？」と問いかけられるときの顔は、それは心の底からにじみ出てくる生き物に対する愛情の表れだと感じました。

講演の内容をもう少し細かく報告しなければと



動物の骨の実物を紹介する先生

思うのですが、公演中の私の頭の中はマイクは大丈夫か、パソコンは、写真を撮らないと……と、周辺のことが気になって、先生の話の内容があまり頭に残っていません。でも先ほども書きました、先生の楽しそうな雰囲気味わうことはできました。参加者のお一人から「中学校や高校でこのような授業をしてもらっていたら……」との声を聴けたことで、参加者は楽しく聴いていたのではと、ホッと胸をなでおろしました。

講演が終わり会場の片づけもそこそこに、盛口氏と会長を乗せ関西空港に車を走らせました。車中では野本三吉さんのお話や、ご自身の現在に至るまでの経緯などのお話も聞け、このままもう少し聞いていたいと思いつつも、交通渋滞もなく順調に関西空港に到着。名残惜しい気持ちを持ちながら第一ターミナル前で盛口氏とお別れ。バタバタとしながらも、あつという間の2日間でした。

もっと理科が好きになったのでは

兵庫県 済木 宏司

『おやまと』令和7年8月号を読んだ妻から突然、「私これに行きたい」の一言から数年ぶりの大倭行きが決まる。過去には令和5年の大倭会文化講演会に声をかけたがスルーされたことを思

い出す。今回の講師である盛口満氏の『学校という場で僕が教わったこと。ものごとこの歴史』というところに強い関心を持ったらしい。昭和60年に大倭安宿苑「須加宮齋」を退職してから40年その間に何度か来奈したが大倭拝殿に入るのは初めてである。大倭拝殿に入るまでに元上司の反保良さん、岸田哲さん、そして今回の依頼者青山法義さんと再会する。皆、私のことを覚えてくれていて少し感動、感涙？

大倭拝殿に入り法主さんの写真が目に入る。その瞬間、鈴木母さんがなぜか私のことを『麻呂さん』と呼んでいたことを思い出す。同時に懐かしさと身体が楽になったような気分になり不思議な感覚となる。講師である盛口満氏にも目が向き、



歌などを行う島歌の沖繩に前後の講演
水島照美さん

授業を受けていたらもつと理科が好きになったと悔やまれる。会場の老若男女も骨や金属類等に見

一目で飾り気のない朴訥な人物ではないかと感じる。内容は今まで受けてきた授業・講義がそうであつたらよかったと思うほど引き付けられ、ごく自然に入ってきた。小

入り、少年少女のような顔をしていたのではないかと感じた。クイズでは沖繩大学のノートまでゲットしてしまふ。素直にありがとうございます。帰路、齋庭で足が止まる。42年前の4月、就職のため大倭に来て齋庭に咲く桜を見たが空気の流れが違い、この世にユートピアがあるとすればまさにこの場所ではないかと感じた幻想的な光景であつた。大倭の自治会にも入り、約2年間という短い期間であつたが濃厚な時間を過ごした。それと遜色のない濃厚な2時間半の講演会であつた。妻に「どうだった？」と尋ねると「良かった」と表情を見れば多くを語らずに済む。長時間運転してきた甲斐があつたというもの。機会があればまた参加したいと思ひますので皆さんお元気で……

じんづうりきによぜ
「神通力如是」の真意をさぐる

第四十一回

大倭教の源流にさかのぼって

今回でいよいよ昭和16年12月8日の日米開戦の月に入りますが、倭姫が今までと同様の神語りを強い調子でくり返していることに注目してください。今回は註釈は特にありません。

原文

十一月二十九日 午前七時 於鳥見庄山、太陽拝セル時。

高天原ニ神集リ 八百萬餘ノ神等方手ニ手ニ妙法タズサエテ 悪魔退治ニ出デラレ候。(題目) 悪魔襲來。(題目)

君ガ代ハ千代ニ八千代ニ壽ギテ 我ガ皇孫ノミヒカリハ、四方山四海ヲ耀スナリ。之レ即チ日ノ本ノ皇孫ノ稜威。(題目)

同日 午前八時内陣ニテ。
倭姫、挨拶。

「大内山松ノ緑ハ色マシテ、田鶴トビカウヅ芽出度ケレ。竹ノ園生ノ賑ヒヲ代々永久ニマサリユク。代々永久ニマサリ行ク」皇室御繁栄。

如何ニグルリヨリ我ガ皇孫ヲ攻メヤウトモ我皇孫ニハ八百萬餘ノ神等方守護

シ、天津御祖ハ陰ニナリ守護致サム。皇室トハ皇孫ノ大内山、九重ノ奥ノ事ナリ。「九重ノ奥ヨリ賑ハヒキコエ來テ、我ガ日本ノ繁栄ハ、代々永久ニ重ネ行ク、代々永久ニ重ネ行ク」

十一月三十日 午前七時 於鳥見庄山、太陽ヲ拝セル時。

大君ノ為 ミジカキ命モ永ラハテ、我ガクニノタメ、スメミマノタメ 盡シマツラン心カナ。倭姫。

大八洲島、アサミドリ澄ミ渡リタル大

空二

鶏ナキ渡ル朝ボラケ。ア、メデタヤナ、芽出度ヤナ。

龍田明神。

二十八日豊橋ノ突風ハ我方行カヲ示スナリ。

内陣ニテ。

倭姫、挨拶、神楽。

「君ガ代ハ千代ニハ千代ニ壽キテ 我方日本ノスメミマノ 君ノヨハヒハ幾千歳ノ後マデモ 代々永久ニカハルマジ 代々永久ニ榮行クト 田鶴ナキ渡ルゾ芽出度ケレ」

十二月一日 朝 於鳥見庄山。

倭姫。

大内山ノフカミドリ 松ヶ枝アソブ丹頂ノ、君ガ代ハ千代ニハ千代ニトコシエニ 代代永久ニ栄エルト 歌ヒ舞フコソ芽出度ケレ。題目。

現代語訳

11月29日 午前7時 鳥見庄山に於いて 太陽を拝せる時。

倭姫 「大倭鶏杜にある大倭神宮に高級霊人の集いがあり、数多くの霊人達が手に手に正しい教えをお持ちになり悪魔退散に出かけられました。

(題目) 悪魔襲来する。(題目)

スメラミコトのおられる世はいついつまでもありがたく、めでたく栄え、我々のニギハヤヒより続く御子孫の御光は全世界を輝します。これがつまり日本の皇孫のご威光なのです」

(題目)

同日午前8時 内陣にて。

倭姫 挨拶

倭姫「大倭鶏杜の松の緑は色鮮やかに、鶴が飛び交うのは芽出度ことです。大倭鶏杜の竹の園生の富み栄えは代々永久に盛んになります。代々永久に盛んになります」皇室御繁栄。

倭姫「どの様に周(まわり)から我々の皇孫を攻めようとも我々の皇孫には数多の高級霊人が守護をして奇稲田姫が陰から守護をされます。皇室というのは皇孫がおられる大倭鶏杜、皇居の奥の事なのです」

倭姫「皇居の奥より賑いが聞こえて来ました。我々の日本の繁栄は、世世永久にくり返して行きます。世世永久にくり返して行きます」

11月30日 午前7時 於鳥見庄山、太陽を拝せる時。

倭姫「天皇(スメラミコト)のため、自分の限られた命であっても、私たちの国のため、皇孫のため尽力する心です。倭姫は。

多くの鳥々から出来ているこの日本、浅緑色に輝やく大空に鶏がなきながら渡っていくこの夜明け、ああめでたいことです、めでたいことです」

龍田明神「28日の豊橋の突風(※新聞にあった)は龍神の行力を示しているのです。

内陣にて。

倭姫、挨拶、神楽

倭姫「スメラミコト(天皇)のおられる世はいついつまでもありがたく、我々日本のニギハヤヒより続く御子孫の天皇の時代は何千年の後までも代々永久に変わることはなく、代々永久に栄えて行くのだと鶴が鳴きながら飛んでいくのはめでたいことです」

12月1日 朝 鳥見庄山に於て

倭姫「大倭鶏杜の濃い緑色の松の枝に遊んでいる鶴が、天皇の代は何代も何代も永遠に代々永久に栄えてゆくと歌い舞っているのはめでたいことです」(題目)

お便りへの返信——霊界とのおつきあい

さまざまな形で相談が寄せられることがあります。ここでは手紙の形で書かれた霊的なことに関する相談に対しての返信の一部を載せました。断片的なものなので理解しにくい面もあるかと思いますが何かの参考にしてください。 編集部

……あなたの心に働きかけている霊の心を、それを信じる前に、その伝えられている言葉をしっかりとつかんで、それが常識ある人間の言葉かどうかを考え直してください。霊界から伝わってくるものを、無条件で信じるものではありません。霊界にもいろんなレベルがありますから。つまり霊界にも、いろいろありますから注意が必要ですよ。

霊界からの通信もいろいろあって、自分に都合のいいところだけを受け入れてはいけません。今あなたに伝えたいのは、この一点につきま。自分を見失ってはいけません (杉本順一)

あじさい日誌

2月7日 本紙「おやまと」の編集会議が12時半から教務本庁で行われました。

午後2時から大倭会主催視会が開かれました。

午後6時から大倭会館で大倭町自治会の役員会が開かれました。

2月9日 法主帰幽祭。御帰幽30年。

午後1時45分から奥津城においてご挨拶。拜殿に入り帰幽祭。この日は平成元年12月23日の降誕祭の法話の映像記録を見ていただきました。

祭典後大倭会館で恒例になった大祭後の参加自由の交流会がありました。

2月15日 うれしくも驚がきれいな声で春を告げに来てくれました。

午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後5時から大倭会館で春の文化講演会(3月7日大倭会・F I W C共催)の準備会議が大倭会館で行われ、14名が出席されました。

2月17日 日妙師(法主生母)の御命日。

2月23日 午後1時20分から大倭神宮において申孝祭。ひき続き2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。この日は昭和

38年2月23日の申孝祭法話を聞いていただきました。

2月27日 午後5時から本紙「おやまと」の編集会議が教務本庁で行われました。

編集会議後引き続き3月7日の文化講演会の準備会議に移りました。

3月1日 午前8時から大倭墓地の掃除が行われました。

3月4日 午前10時前拜殿にお詣りに来られた女性につられて一羽の小鳥が拜殿に飛び込んできました。驚いたのか奥の礼拝

の間の明かりに引き寄せられてか、外に出られならしいとの事。入り口を大きく広げて、自動で消える明かりに任せて出ていってくれと願ったが、なんと午後4時過ぎに福井の齋藤正宏さんが拜殿に入ってお詣りするまで小鳥は拜殿にいたらしい。最後は齋藤さんが手づかみで外に放たれました。

3月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時から大倭会館で巳後の会が行われました。

3月7日 午後2時から歌手の加藤登紀子さんを迎えて大倭会文化講演会が行われました。

大倭安宿苑では

2月12日 午前11時より資格取得手当授与式が行われ、3名の職員が実務者研修の資格を取得されました。

2月25日 午前10時半より令和

8年度新規採用者事前説明会が行われ、2名の新卒の方が参加されました。

(菅原園)

2月18日 午後より各交流ホールで喫茶サロンが開かれ、ホットケーキが焼けるのをまだかまだかと職員を急がす場面もあり、ホットケーキを食べ、喜んでいました。

2月21日 午後より会議室にて映画「ベートーヴェン捏造」を上映。内容がコメディだったので「面白かった」や、「楽しみにしていたから嬉しかった」などの声も出ていました。

(須加宮祭)

2月10日 先生にきていただき、書道クラブを行いました。皆さん、お手本をみて熱心に書いていました。

2月12日 昼食時、ホットプ

文化講演会開催される

去る3月7日に大倭会と交流の家・F I W C関西委員会の共催で大倭会文化講演会が歌手の加藤登紀子さんを迎えて「あらゆる分断を超えて―交流の家と私の縁を語る」のテーマで開催されました。会場の大倭拜殿は130人を超える参加者で熱気にあふれました。加藤さんの要望もあって97歳の詩人の金時鐘ご夫妻も参加され、貴重な発言をしてくれました。

レートで餃子を焼き、焼きあがると、職員が皿にのせ、焼き立てをおいしそうに食べました。

(長曾根祭)

2月22日(特養)利用者と職員で雛祭りの飾りつけを行いました。

2月23・26日(デイ)作品づくりで皆さんと一緒にひな人形の置物を作りました。

(茂毛路園)

2月14日 バレンタインデーという事でチョコのお菓子が用意され、女性職員から入居者に手渡しして最後に記念撮影を行いました。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

4月6日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

最後には矢追家麻呂教長さんから大きな花束が手渡され、温かい拍手に包まれました。詳しくは本紙で報告させていただきます。

*須佐緒祭(大倭大本宮)

4月8日(水) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。恒例の園遊会はなくなりしました。

須佐緒祭とは、宇宙万物一切の顕幽両面における一体のもとたる須佐(結び)の緒に感謝をするお祭りです。

*大倭会主催視会

4月12日(日) 午後2時より大倭拜殿にて。

*箭負祭(大倭神宮)

4月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

箭負祭とは、皇祖天神の鎮ります登美の神奈備(大倭神宮)の霊威を法主日聖大恩師の遠祖(箭負氏)が代々祭祀し、神仕えしてきたことを記念するお祭りです。

*鈴月かあさん25年帰幽祭

4月19日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

*月次祭(大倭大本宮)

4月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拜殿にて。

鈴月かあさん帰幽祭

ご案内

4月19日(日) 午後2時より大倭大本宮拜殿にておいて鈴月かあさん25年目の帰幽祭を行います。

5年ごとですので次回は令和13年になります。